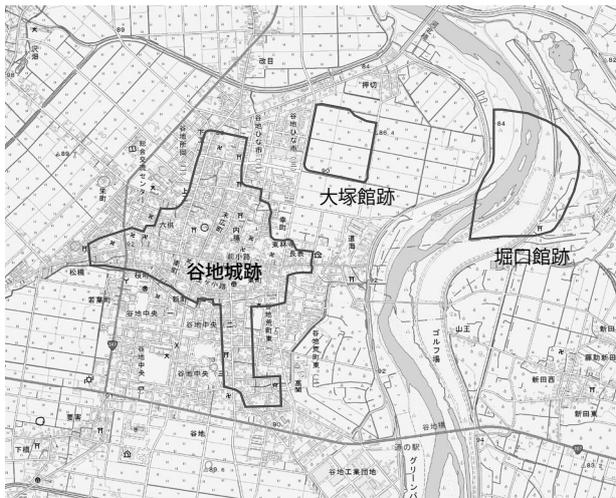


やちじょう 谷地城跡

遺跡番号 321-051
調査回数 第1次
所在地 山形県西村山郡河北町字谷地
北緯・東経 38度25分35秒・140度18分52秒
調査委託者 河北町教育委員会生涯学習課
起因事業 河北町役場新庁舎建設
調査面積 2200 m²
受託期間 平成31年4月1日～令和2年3月27日
現地調査 令和元年5月7日～8月16日
調査担当者 天本昌希（現場責任者）・渡辺和行
調査協力 河北町新庁舎建設課・升川建設株式会社・山形県村山教育事務所
遺跡種別 城館跡
時代 中世・近世
遺構 掘立柱建物跡・ピット・溝状遺構
遺物 陶磁器・漆器・石製品（文化財認定箱数：10箱）



遺跡位置図 (1 : 50,000)

調査の概要

谷地城跡は、河北町の中心市街地に展開する中近世の城館跡で、寒河江川扇状地の端部に立地する。今回の調査は、町役場の建設事業に伴い実施された。調査区は、建物面積 2200 m²を調査している。

遺構と遺物

今回の調査は、谷地城跡で行われるはじめての大規模な発掘調査である。検出遺構は、掘立柱建物 5 棟、ピット 522 基、溝状遺構 28 条、土坑 22 基を検出している。出土遺物は中世から近世の陶磁器や木製品など整理箱で

10 箱ほど出土している。

掘立柱建物跡は SB60～64 まで、5 棟検出している。SB60 は調査区北側に独立して立地しているが、他は西側に寄り、SB61 と 62、SB63 と 64 がそれぞれ同軸で近接するため、同じ建物となるかもしれない。これら以外のピットは、規格的に並ばず、掘立柱建物として組みなかった。

多くのピットには、礎盤構造がみられる。礎盤には、木材を複数並べたものが多く用いられ、それらには径数 cm 程度の樹皮のついたままの枝、薪のように粗割りしただけの分割材、廃棄された建築部材などが用いられている。用いられる樹種を同定するには至らないが、目視で確認できる限り、統一的なものはなく複数の樹種が用いられている。枝に残る樹皮から桜と判断できるものはいくつかみられた。礎盤には木材のほか、拳大の円礫を敷き詰めて根石としたものもみられる。これらは木材のものとは比べると、地区も限定的で、大部分が SB61、62 として組めるものになる。一方、枝材のものは調査区全面に多数検出するも、建物を組めないものや単独で検出しているものが多い。

こういった礎盤の目的や使用方法については、SP1064 や SP1145 で残存する柱材の下に木材を並べた

状況を検出しており、柱の沈下防止のための措置と解釈できる。遺跡の立地する寒河江川扇状地の端部の安定しない地盤への対応と考えられる。このような工法が低地への対応として、全国的にどの程度一般的なものであったのかは定かではない。類例は2014年に調査された山形城三の丸第14次調査、0-3区SK1984に1か所見られる(当センター240集)。

溝状遺構は、調査区の東西に展開するSD2とSD3を中心に28条検出している。東西に展開するものはN-65°~75°-Wに、南北に展開するものはN-17°~20°-Eに収まる近似した主軸を持つものが多い。それぞれ組み合わせあって区画を作り出していたものと考えられる。これらはすべて同時期のものではなく、重複関係から時期差がうかがえる。溝状遺構には、幅2~4m程度のものと、幅1m未満のもの2種類がある。断面は逆台形で、底面は上がり下がりを経ているものが多い。出土遺物の多くは、これらの溝状遺構から出土したものが大部分を占める。

出土した遺物について、主なものは陶磁器、木製品、石製品、古銭である。陶磁器類は中世から近世に属するもの、特に16世紀から17世紀にかけての遺物が多く、輸入磁器の青磁や青花、国産陶器の瀬戸美濃、肥前陶磁器がみられる。それ以前のものとしては13世紀後半から15世紀にかかる輸入磁器や、珠洲の播鉢や甕、他に古瀬戸後期の筒形容器や瓶類、盤もしくは折縁深皿の破片、在地で作られたとみられる瓷器系陶器がみられる。木製品では漆器椀・皿、木皿、曲物の部材、^{ざる}笊などの食物の供膳や加工に係るもの、下駄や横櫛といった日用品、年貢米に係る可能性のある木簡などが出土している。石製品には、石塔の相輪があり、類似したものが寒河江市にある上の寺遺跡から出土している。ほか、硯、砥石、凹石、茶臼も出土している。古銭は北宋銭が多く、次いで明銭が多い。一括して出土するものも多く、SD3溝状遺構では25枚がまとまって出土している。寛永通宝など近世のものは1枚も出土していない

まとめ

調査の結果からは、遺構の重複関係、出土遺物の年代、炭素年代測定結果などから考えて、いくつかの時期差がみられた。前半のものでは、SD2溝状遺構とSD46溝状遺構で区画されるもので、出土遺物や炭素年代の測定値

から15世紀中頃~16世紀中頃が想定できる。これまでの文献史上の研究では、16世紀中頃まで谷地地区に開発は及んでいないとされてきたが、これを大きく遡る結果となった。

後半のものは、SD3溝状遺構で区画されるもので、16世紀中頃~17世紀前半と考える。SD3は調査区の北側を東西に横断し、エネルギー棟区で南方向に折れる。重複関係からはSD2などに後続する。出土遺物は、15世紀後半~16世紀中頃の貿易陶磁や瀬戸美濃の大窯I~II期の皿が複数みられる。これらに続く16世紀末~17世紀前半代の国産陶磁器もいくつかあり、唐津の皿や肥前磁器などがある。これらは前者に比べ、覆土の上層や確認面で出土しているものが多い。木製品の炭素年代測定でも近似した値が得られている。このような年代観は、従来考えられてきた谷地城の築城の時期と廃城の時期に整合的な結果といえよう。また、根石を詰めたピットで構成される掘立柱建物は、重複関係からSD3の時期よりもあとのものといえるが、出土遺物や炭素年代の測定値からは、17世紀代で収まるものである。

これまでの研究において示されてきた谷地城の復元案では、二の丸が本丸を取り囲むように区画する姿を想定している。復元案よると今回の調査区は、二の丸の西堀が南北に縦断する場所にあたる。しかし、実際に検出したものは、東西方向に伸びるSD2やSD3といった、幅2~4m程度の溝状遺構であった。これらが城館を区画する堀として考えるには、幅が狭く、断面形が薬研になるでもない。旧地表面の高さを勘案しても深さは1mに満たないであろう。これを「堀」とするには疑問を覚える。何より本丸方向の東西方向に伸びるのであれば、その用をなさないように思える。今回の調査区だけでは、溝状遺構が全体として方形の区画をなすのか、あるいはクランクして終わるのかは判断できない。また、その機能が二の丸内に展開する個別の屋敷地の地境としてのものなのか、これら自体が二の丸堀の補助的な区画をなすものであったのかは、今後の調査の進展に委ねられよう。

本調査によって、従来考えられてきた谷地城の姿は、再考を求められる結果となったといっていよう。本来の二の丸の区画や谷地城全体の姿を明らかにするためには、今後もさらなる発掘調査の積み重ねが必要である。

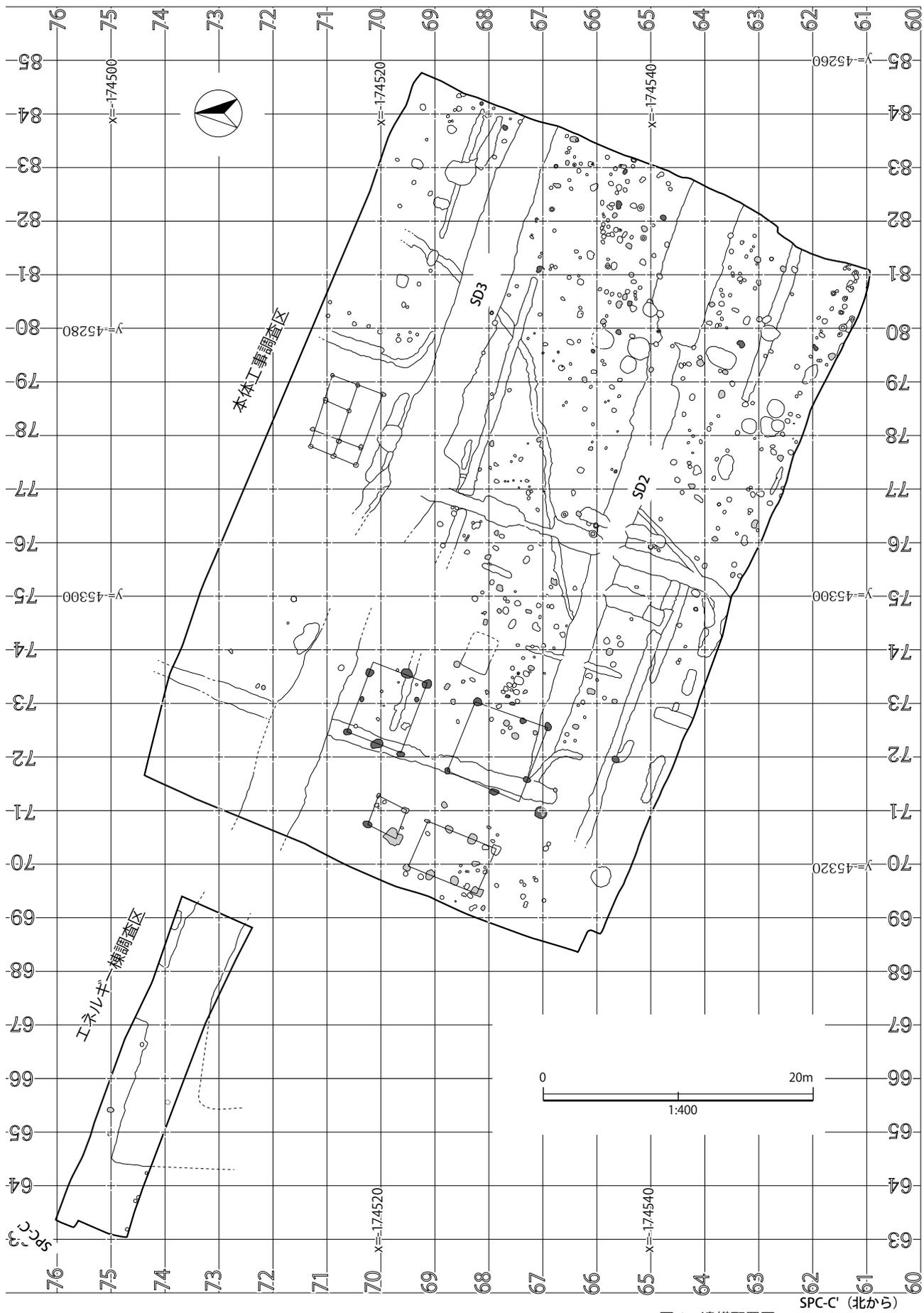


図1 遺構配置図



写真1 掘立柱建物跡検出状況（北東から）



写真2 SP1064 調査状況（北から）



写真3 SP1229 断ち割り（南から）



写真4 SP1250 調査状況（南から）



写真5 SD2 溝状遺構（南東から）



写真6 ざる出土状況（南から）



写真7 SD3 溝状遺構エネルギー棟区（西から）



写真8 調査区周辺空撮（南西から）